

# 街なかの休憩空間が 歩行者の行動や意識に及ぼす影響

鈴木 雄<sup>1</sup>・木村一裕<sup>2</sup>・日野 智<sup>3</sup>・南出拓也<sup>4</sup>

<sup>1</sup>正会員 秋田大学大学院 技術職員 土木環境工学専攻 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)

E-mail:yusuzuki@gipc.akita-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 秋田大学大学院教授 土木環境工学専攻 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)

E-mail:kzkimura@gipc.akita-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 秋田大学大学院准教授 土木環境工学専攻 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)

E-mail:hino@gipc.akita-u.ac.jp

<sup>4</sup>正会員 株式会社ミルコン (〒910-8560 福井県福井市長本町202番地)

E-mail:t-minami@po.milcon.co.jp

近年、地方都市では中心市街地の衰退が大きな問題となっている。再び、人をひきつけ賑わいを取り戻すためには、中心市街地を訪れた歩行者にとって、快適で過ごしやすい環境を整える必要がある。そのためには、歩行空間の整備とともに、休憩空間の整備も不可欠である。快適な休憩空間を整備することは、利用者にとって休息や憩いの場になるだけでなく、その空間で飲食をすることや、休憩後また街歩きをすることなどから、滞在時間の増加や歩行範囲の拡大などの効果に期待できる。ただし、一概に快適な休憩空間と言っても、利用者により快適と感じる空間は様々である。本研究では各属性ごとに、街なかに長く滞在する歩行者の行動パターンや、街なかでの過ごし方に対する意識を把握することで、歩行者が快適に長く街なかを散策してみたくなるような休憩空間について考察する。

**Key Words** : 休憩空間、滞在時間、空間イメージ

## 1. はじめに

### (1)研究の背景と目的

近年、多くの地方都市の街なか（中心市街地）では空洞化が進み、賑わいが失われている。賑わいの創出には、街なかを訪れた歩行者にとって過ごしやすい環境を整えることが必要である。そのためには、歩行空間の整備とともに、休憩空間の整備も重要である。

街なかには、公園のベンチや施設内の休憩所など様々な休憩空間があり、その利用のされ方は利用者や利用目的により様々である。最近ではオープンカフェの実証実験なども盛んに行われ、ますます休憩空間に対するニーズは多様化している。佐賀県唐津市の「まちなか休憩所」は、幅広い利用者に配慮したユニバーサルデザインの空間づくりを目標に空き店舗を利用して 2010 年に整備された休憩空間である。

多様化する休憩空間のなかで、多様化するニーズをと

らえ、街なかに快適な休憩空間を整備することは重要である。快適な休憩空間を整備することは、利用者にとって憩いの場を提供することにとどまらず、休憩空間で飲食をすることや、休憩後にまた街歩きをするなどの効果から、滞在時間の増加や歩行範囲の拡大などに期待できる。

中心市街地の休憩に関する研究においては、休憩空間が滞在に及ぼす役割や、それによる滞在時間の増加に関する研究は既にあり<sup>1)2)</sup>、また、建築分野を中心にベンチの配置などが回遊に及ぼす研究もやられている<sup>3)</sup>。しかし、歩行者の休憩空間に対する利用意識やイメージ、休憩空間の利用の仕方、またその後の街歩きなどについて、細かく属性毎に比較した研究はみられない。

本研究では、街なかでの飲食や休憩、休憩後の街歩き等に着目し、街なかでの歩行者の行動パターンや、街なかでの過ごし方に対する意識を把握する。また、歩行者が快適に長く街なかを散策してみたくなるような休憩空間の要因を属性毎に考察し、各休憩空間に期待できる要素を分析する。

## 2. 研究の方法

### (1)研究対象地

秋田市は、秋田県の日本海沿岸地域中央に位置し、905.65km<sup>2</sup>の市域を有する。2005年に2町を編入し、現在では人口約32万人の県都となっている。平成20年7月に秋田市中心市街地活性化基本計画が内閣総理大臣に認定され、中心市街地活性化の方針が示されたが、未だにその効果が現れているとはいえない。

### (2)調査方法

本研究では、秋田市民および秋田大学の学生を対象に意識調査を実施した。秋田市民を対象とした調査では直接配布・郵送回収方式により、秋田市内の泉地区および東通・広面地区（図-1）に計 300 票配布し、79 票を回収した。泉地区は、JR 秋田駅周辺地域より約 3km、東通・広面地区は約 1km の距離にある。また、学生を対象とした調査では直接配布・直接回収により行い、配布した 48 票すべてを回収した。調査では主に、1)個人および世帯の構成、2)街なかおよび郊外ショッピングセンター（以下、郊外 SC）での行動や意識、3)休憩空間の写真を見ての評価や意識、4)街なかおよび郊外 SC への期待等について質問した（表-1）。



図-1 調査位置（秋田市）

表-1 アンケートの概要

調査対象	泉地区	東通り・広面地区	大学生
配布票数	秋田市民:300票		大学生:48票
回収票数	秋田市民:79票(26%)		大学生:48票(100%)
回答者の内訳	性別:男性72人(57%) 女性55人(43%)		
	年代別: 20代 51人(40%) 30代 8人(6%) 40代 23人(18%) 50代 20人(16%) 60代 15人(12%) 70歳以上 10人(8%)		
	職業別:勤め人 25人(20%) 農林水産業 3人(3%) パート・アルバイト 10人(8%) 主婦 24人(19%) 学生 48人(39%) 無職 14人(11%)		
	主な調査項目		
主な調査項目	1.個人および世帯構成		
	2.街なか、郊外SCでの行動や意識 2-1.買い物頻度 2-2.滞在時間 2-3.飲食・休憩の有無 等		
	3.休憩空間の写真評価 3-1.基本評価 3-2.どのような休み方ができそうか 等		
	4.街なか、郊外SCへ期待できること 4-1.気分転換すること 4-2.多くのお店をまわること 等		

## 3. 街なかでの行動・意識分析

### (1)秋田市中心市街地への訪問頻度と滞在時間

本研究では、中心市街地および郊外SCそれぞれでの買い物頻度や滞在時間などを質問している。中心市街地へ週に1回以上訪問している被験者は全体の4割近いのに対し、郊外SCへの訪問は2割となり、中心市街地への訪問頻度が高い（図-2）。また、滞在時間でみると、中心市街地では2時間未満の滞在をする被験者が全体の7割を超えているが、郊外SCでは4割に満たない（図-3）。これらのことから、中心市街地では訪問頻度が高く、滞在時間は短いといえる。

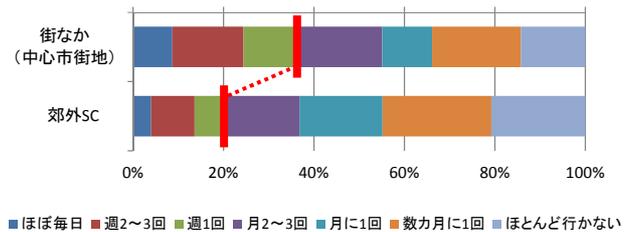


図-2 中心市街地、郊外SCへの訪問頻度

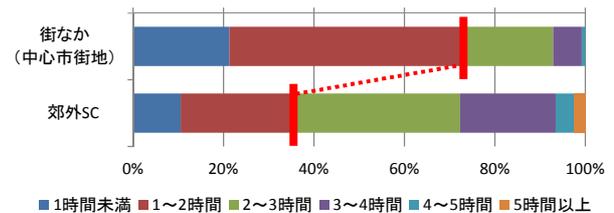


図-3 中心市街地、郊外SCでの滞在時間

### (2)街なか派と郊外SC派の定義

本研究において、中心市街地と郊外 SC への訪問頻度を比較し、中心市街地への訪問頻度の方が高い被験者を「街なか派」、郊外 SC への訪問頻度の方が高い被験者を「郊外 SC 派」、中心市街地と郊外 SC で同じ訪問頻度の被験者を「中間」と定義する。

### (3)街なかでの行動・意識分析

意識調査では、1)街なかで飲食をするか、2)街なかで休憩をするか、3)街なかで買い物の途中でどれくらいで休憩したくなるか、4)目的がなくても街なかに行くか、5)街なかで当初の予定以外の買い物をするか、6)街なかで飲食をするときその環境が整っているかなどの6項目について質問をした（図-4）。その結果、次のことがいえる。

- 飲食や休憩の項目で「街なか派」の方が割合が高い。
- 「街なか派」の方が目的がなくても街なかに行く。
- 「街なか派」の方が予定外の買い物をする。
- 「郊外派」の方が街なかで飲食したいときにその環境が整っていないと感じている。
- 30分以内に休憩したい割合はそれほど変わらない。

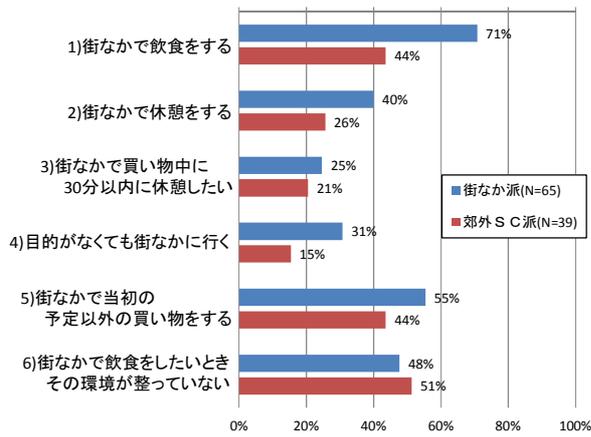


図-4 「街なか派」「郊外SC派」の街なかでの行動や意識

また、街なかでの飲食や休憩と、滞在時間の関係を見ると、飲食や休憩をする被験者は、街なかでの滞在時間が長い(図-5、図-6)。飲食や休憩の分、滞在時間が長くなることは、当然ともいえるが、飲食や休憩による、街なか滞在への効果が示された。

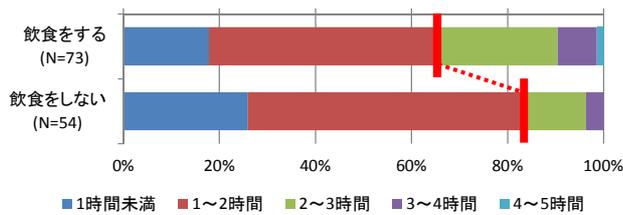


図-5 街なかでの飲食と滞在時間の関係

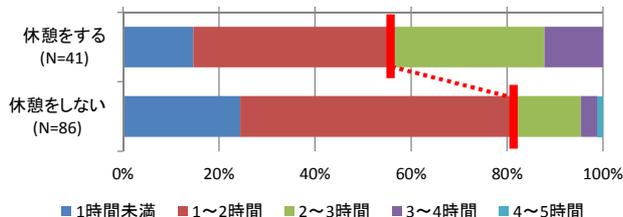


図-6 街なかでの休憩と滞在時間の関係

ここで、飲食や休憩をする割合が高い「街なか派」に着目する。「街なか派」の中での意識や行動を年代別にみる(図-7)。そこから以下のような2つのパターンに分けられる。

- a) 「30~50代」の割合が高いパターン、
  - b) 「20代」および「60歳以上」の割合が高いパターン。
- 「街なかでの飲食や休憩」、「飲食したいときに整っていないと感じている」の項目では「30~50代」の割合が高いパターンである。

また、「30分以内に休憩したい」ことや「目的がなくても街なかに行く」こと、「予定外の買い物をする」などの項目は「20代」および「60歳以上」の割合が高いパターンとなっている。

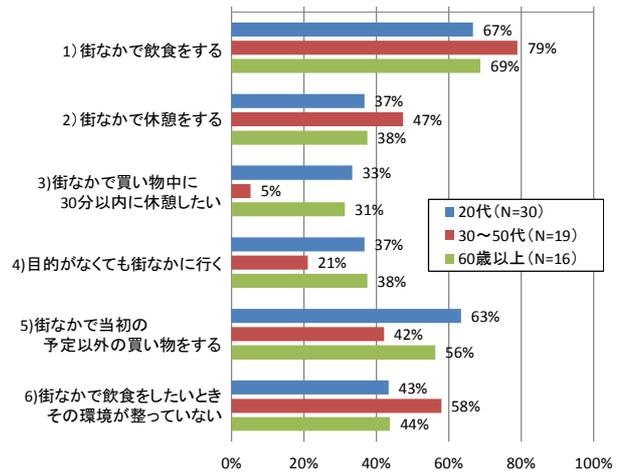


図-7 年代別、街なか派の意識や行動

#### (4)街なかへの期待

街なかで期待できることとして、1)多くの店をまわること、2)多くの人に出会うこと、3)その街独自の雰囲気を感じることに、4)季節感や自然を感じることに、5)最新の流行を知ること、6)気分転換することに、7)街の新しい発見があることについて質問をしている。

街なか派の、街なかへの期待を年代別にみる(図-8)。そこから以下のような3つのパターンに分けられる。

- a) 「30~50代」の割合が高いパターン、
- b) 「20代」および「60歳以上」の割合が高いパターン、
- c) 「20代」や「30~50代」の若い世代の割合が高いパターン。

「多くの店をまわること」や「最新の流行を知ること」の項目では、「20代」や「30~50代」の割合が高いパターンとなっている。買い物に対する期待がみられる。

また、「気分転換すること」の項目では「30~50代」の割合が高いパターンが示された。

また、「多くの人と出会うこと」や「その街独自の雰囲気を感じることに」「季節感や自然を感じることに」「街の新しい発見があること」の項目で、「20代」および「60歳以上」の割合が高いパターンが示された。街なかに対し、散策や雰囲気を楽しむことの期待がみられる。

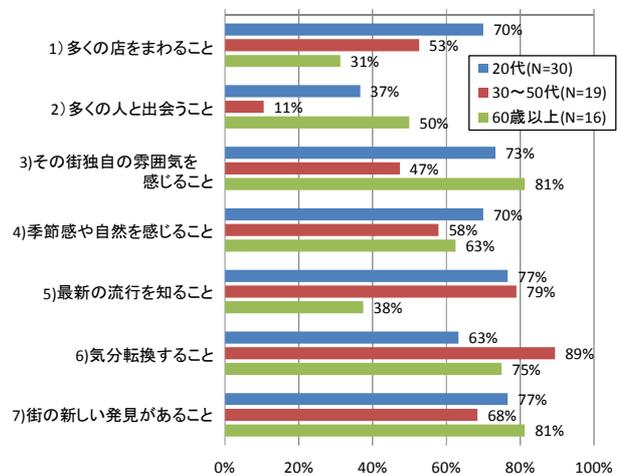


図-8 年代別、街なか派が街なかへ期待できること

「20代」および「60歳以上」の割合が高いパターンに着目する。行動・意識調査では「30分以内に休憩したいこと」や「目的がなくても街なかに行くこと」、「予定外の買い物をすること」などが挙げられ、街なかへの期待においては「多くの人と出会うこと」や「その街独自の雰囲気を感じること」、「季節感や自然を感じること」、「街の新しい発見があること」が挙げられた。

これらのことから、「20代」および「60歳以上」の割合が高いこのパターンは、街なかに滞留しやすい「街なか散策型」のパターンといえる。

#### 4. 休憩空間の評価

##### (1) 休憩空間の評価の概要

街なかでの行動・意識分析により、街なかでの休憩や飲食することで滞在時間が長いことが明らかとなった。そこで、本章では休憩空間に着目し分析を行う。

休憩空間の評価に用いた写真12枚を写真-1に示す。

本研究では、休憩空間の評価として、1)どのような楽しみ方ができそうか、2)この空間が好きか、3)このような空間が街なかに足りているか、4)この空間で休んだ後にまた街歩きしたいかの4項目について質問をした。

また、休憩空間の印象として、1)人の動きが眺められてよい、2)街並みや風景を眺められてよい、3)周りを気にせず休めてよい、4)明るくて開放的な感じ、5)囲まれている感じで落ち着く、6)飲食ができそうでよいの6項目について、「そう思う」から「そう思わない」まで4段階で把握した。

##### (2) 年代による休憩空間の評価

休憩空間の評価として、「好き」と回答された割合を年代別にあらわしたものを図-9に示す。

「広場1」や「広場3」は、どの年代においても、高い値を示している。また、「街路4」「施設3」などは20代の値が高く、若者好みの空間といえる。「街路2」や「施設4」において、「20代」および「60歳以上」の割合が高い「街なか散策型」のパターンがみられた。

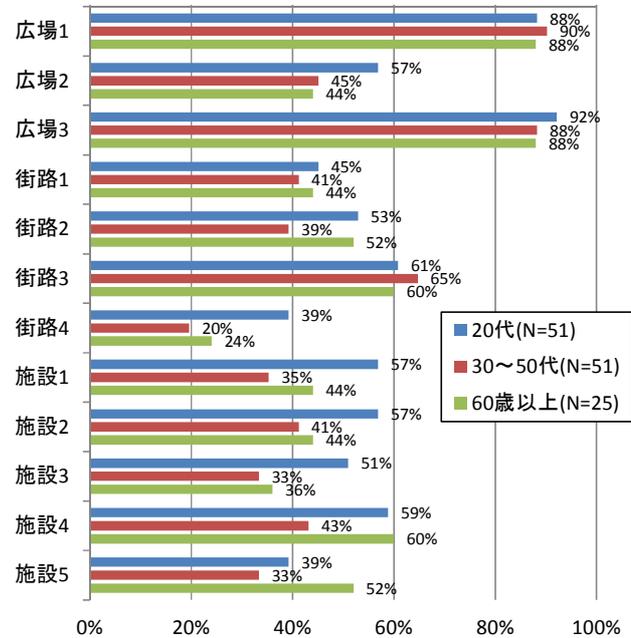


図-9 年代別、休憩空間の選好



写真-1 評価に用いた休憩空間の写真

「20代」および「60歳以上」の割合が高い「街なか散策型」のパターンが示された「街路2」および「施設4」の空間に対する印象評価の上位3項目を、図-10に示す。

街路2	施設4
	
人の動きが眺められてよい(75%)	明るく開放的な感じ(88%)
明るく開放的な感じ(74%)	人の動きが眺められてよい(62%)
街並みや風景を眺められてよい(70%)	飲食ができそうでよい(51%)

図-10 「街なか散策型」の空間

空間に対する印象の評価において「街路2」「施設4」の上位3項目で、「人の動きが眺められてよい」「明るくて開放的な感じ」が共通して挙げられた。

人の流れが多く、明るくて開放的な空間であることがわかる。また、「街路2」では「少し腰をかける程度」、「施設4」では「5,6分ほど疲れがとれるまで」の休み方ができそうだと、もっとも多く選択された。

### (3)「街なか派」「郊外SC派」別よる休憩空間の評価

休憩空間の評価として、「好き」と回答された割合を「街なか派」「郊外SC派」別にあらわしたものを図-11に示す。

「郊外SC派」と比較し、「街なか派」の割合が高い空間は「街路1」や「施設5」などである。

また、「郊外SC派」の方が高い割合を示した空間は、「広場1」や「広場2」などである。

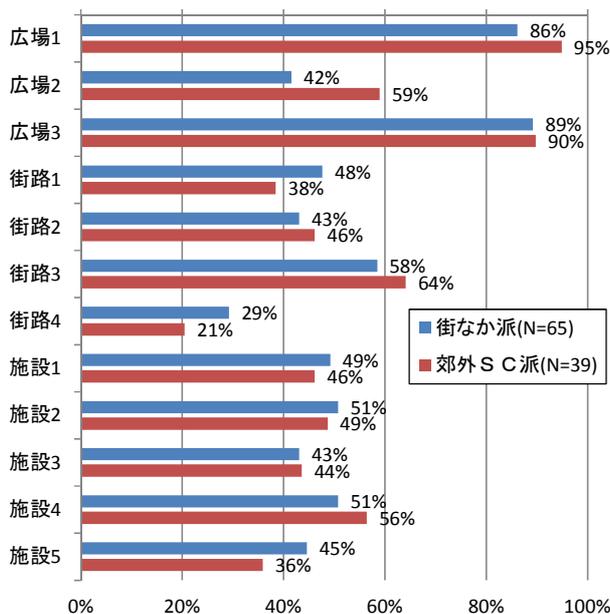


図-11 「街なか派」「郊外SC派」別、休憩空間の選好

「街なか派」の割合が高い、「街路1」および「施設5」の空間に対する印象評価の上位3項目を、図-12に示す。

街路1	施設5
	
人の動きが眺められてよい(67%)	人の動きが眺められてよい(64%)
明るく開放的な感じ(62%)	明るく開放的な感じ(46%)
飲食ができそうでよい(49%)	飲食ができそうでよい(19%)

図-12 「街なか派」の選択割合が高い空間

空間に対する印象の評価において「街路1」「施設5」の上位3項目で、「人の動きが眺められてよい」「明るくて開放的な感じ」「飲食ができそうでよい」が共通して挙げられた。

「街なか派」は、街なかの一角にあるような、人の流れが多く、明るくて開放的で、飲食もできる空間を好むことがわかる。

また、「街路1」「施設5」でともに「少し腰をかける程度」の休み方ができそうだと、もっとも多く選択された。

次に、「郊外SC派」の方が高い割合を示した「広場1」および「広場2」の空間に対する印象評価の上位3項目を、図-13に示す。

広場1	広場2
	
街並みや風景を眺められてよい(91%)	周りを気にせず休めてよい(54%)
明るく開放的な感じ(83%)	明るく開放的な感じ(43%)
周りを気にせず休めてよい(68%)	囲まれている感じで落ち着く(43%)

図-13 「郊外SC派」の選択割合が高い空間

空間に対する印象の評価において「広場1」「広場2」の上位3項目で、「明るくて開放的な感じ」が共通して挙げられた。

「郊外SC派」は、屋外にあり明るく開放的な公園のような空間を好むことがわかる。休憩空間に癒しや休息を求めているといえる。

また、「広場1」では「5,6分ほど疲れがとれるまで」、「広場2」では「少し腰をかける程度」の休み方ができそうだと、もっとも多く選択された。

「街なか派」は、人の流れが多く、賑わいを感じられる休憩空間を好むのに対し、「郊外SC派」は、静かな公園内のベンチなどがある休憩空間を好むことがわかる。

#### (4)休憩後の街歩きについて

休憩をとることで、休憩後にまた街歩きをするなどの効果から、滞在時間の増加や歩行範囲の拡大などに期待できる。

本研究では、各休憩空間で休憩後、また街歩きをしたいかどうかを質問している。その結果を図-14に示す。

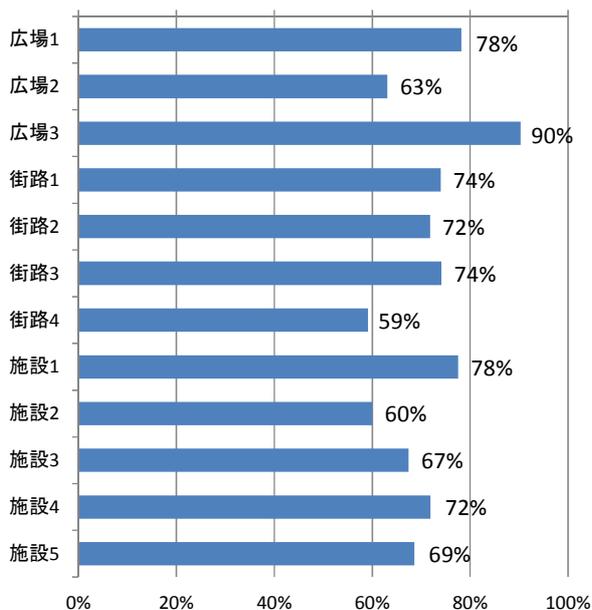


図-14 各空間で休憩後、また街歩きをしたいか

どの空間においても、休憩後に街歩きをしたい割合は高い。このことから、基本的にどの休憩空間においても、休憩することでその後の街歩きに効果があるといえる。

「広場3」は非常に高い値となっている。一方、「街路4」や「施設2」などは、他と比べるとやや低い値となっている。「広場3」および「街路4」の写真を図-15に示す。



図-15 「休憩後の街歩き」の評価が高い空間、低い空間

「広場3」には背もたれがあり、「街路4」や「施設2」にはそれがない。他の空間をみても、背もたれがな

い休憩空間は、比較的評価が低くなっている。

休憩後に街歩きをするには、ある程度疲れを取る必要があり、その際に背もたれが必要だと考えられる。

#### 5. おわりに

本研究は秋田市民および大学生を対象とした意識調査から、休憩空間に対する意識や行動について明らかにしたものである。

街なかでの意識・行動調査により、「街なか派」と「郊外SC派」とでは、飲食や休憩、目的がなくても買い物に行くことなどの意識や行動で違いがあることが示され、これらのことが、街なかへの訪問回数や滞在時間に影響していると考えられる。

街なかでの意識や行動を年代による分類を行い、その特徴を把握した。特徴的な、「20代」および「60歳以上」の割合が高くなる「街なか散策型」のパターンも示された。

また、休憩空間の評価においても、すべての年代での評価が高い空間や、ある一つの年代の評価が高い空間など、好まれる休憩空間にもパターンがある。休憩空間の評価においても「20代」および「60歳以上」の割合が高くなる「街なか散策型」のパターンが示された。

「街なか派」「郊外SC派」の違いによっても、好まれる空間に差があり、「街なか派」では賑わいを感じられる休憩空間を好むのに対し、「郊外SC派」は、静かな公園内のベンチなどがある休憩空間を好むことがわかった。

今後は示されたパターンごとに、好まれる休憩空間の詳細な分類やタイプ分けが必要であり、休憩空間の分類による分析も必要である。

#### 参考文献

- 1) 青木俊明：中心市街地の訪問動機の分析とそれに基づく活性化法策の考察 -宮城県仙台市を題材に-，都市計画論文集，40-3，pp.643-648，岩波書店，1962。
- 2) 柿沼美紀，十代田朗，津々見崇：高齢来街者の滞留行動特性に関する研究 -巢鴨地藏通り商店街を対象として-，都市計画学会論文集，43-3，pp.625-630，2008。
- 3) 内山紀美子，佐々木伸：歩道におけるベンチ設置の現状と休憩空間整備の方向性，日本建築学会技術報告集，第14巻第27号，pp.281-286，2008.6

(2011.?.?受付)